

「かささぎの……」の歌の詠歌時間

——「夜ぞ更けにける」の解釈——

小 林 賢 章

『百人一首』6番の歌は、中納言家持の

かささぎのわたせるはしにをく霜のしろきをみれば夜ぞ更けにける

である。従来この歌の解釈で問題になったのは、「かささぎの橋」が天上の天の川か、地上の、ことに宮中の橋かということであった。中世の『百人一首』の古注では、天上の天の川だという解釈が行われていたが、荷田在満の『百人一首解』や賀茂真淵の『百人一首古説』や『宇比真奈備』の中で、この河が宮中の橋のことかと指摘したことで、それ以降は宮中の橋説が、『百人一首』の解釈としては有力とされてきた。

しかし、最近、堀勝博によって、宮中の橋説の反論が行われた^①。

① 「烏鵲（橋）」は『全唐詩』などに見られる用例を検討すると天漢を意味して使用されている。

② 『大和物語』 一一五段の「かささぎの渡せる橋の霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ」の歌を真淵は宮中の橋と捉えたが、それは間違いである。

③ 「かささぎの橋」男女の逢いがたい関係を意味して使用される。

④ 右の事情を裏つけるのが、「夜ぞふけにける」で、堀は、「夜更く」は「万葉以来、逢瀬のかなはむまにいたづらに夜がふけていくといふ場合にいわれることが多い。」と述べている。さらに、「夜更け」は単なる時刻表示ではなく、切実に来訪を待つ人事の意味がこめられてゐる。」とも述べている。

⑤ 「霜」についても、当時の用例から、「霜」は単なる属目ではなく、「待てど来まらず」と言はれたやうな夜更けの空闊の情を象徴するものとして詠まれてゐる。」と、当時の和歌の用例を根拠として述べている。

以上、堀勝博の論文にこの歌の解釈の問題点はすべて指摘されていると考える。以上の正当性を、万葉・平安時代の時間表現の視点から追認しようというのが本稿の目的である。

二

かさ、さぎの渡せる橋とは、天の河の事也、七夕にはさをならへて、七夕をわたすといふ事あり、これより天川をかさ、さぎのわたせる橋といふ也、をく霜とは、あなちまことの霜にあらず、冬の夜のあけかたに、この河のさらさらとするを、銀河といへり、さらさらとするをみれば、よのあくるといふけいきを云也、月落鳥鳴霜満天、といふも、このころ也（『百人一首古注』）

右の注は、「長享元年極月十四日」の奥付を持つ『百人一首』の注釈の一つからの引用である。右書が「古典文庫」の一冊とし

て出版されたとき、編者の吉田幸一は、長享元年（二四八七）十二月の古写と判定して間違いないと思う」と記し、さらに、「長享元年奥書は、書写年代であつて、成立はそれ以前にさかのぼると考えられる」と述べている。つまり、間違ひなく中世の『百人一首』の注釈であり、それもその中でも古いものの一つであつた。

右の注釈は二段からなつてゐる。「かさ、きの渡せる橋とは、天の河の事也、七夕にはさをならへて、七夕をわたすといふ事あり、これより天川をかさ、さきのわたせる橋といふ也」が最初の部分で、「かささぎのわたせるはし」は天上の天の川に掛けられた橋のことだが、直接には天の川そのものであるという指摘である。前節で述べた堀の主張①と重なる。

次は、「をく霜とは、あなちまことの霜にあらず、冬の夜のあけかたに、この河のきらきらとするを、銀河といへり、きらきらとするをみれば、よのあくるといふけいきを云也、月落鳥鳴霜満天、といふも、このころ也」の部分である。本稿で問題とするのはこの部分の解釈である。

同注では、「冬の夜のあけかたに、この河のきらきらとするを」と言つてゐる。まず、問題となるのが、この「あけかた」である。先に、「あけかた（明け方）」は午前三時過ぎ（または、「頃」）を指す語だと述べた。この部分でも、もし、「あけかた」が現在のように、空がほのあかるくなる頃であるとすると、「この河のきらきらとする」と天の川を視認することなど不可能であろうとすれば、この「あけかた」は、まだ真つ暗な午前三時過ぎでないといけないことになる。

ところがここでもう一つの問題が生じる。右の注は、「かささぎの……」の歌に注されたものである。「かささぎの……」の歌注には、時間表現としては、「夜ぞ更けにける」と詠んでゐる歌の注釈に午前三時過ぎ（頃）の時間を注釈してゐることになる。とすると、この注者は、「夜ぞ更けにける」が午前三時頃にも及ぶと言つてゐることになる。

三

先に、夜が主語で、述語が更くである「夜がふく」時間についても述べたことがある。「夜がふく」、通常「夜がふけぬ」とか「夜がふけて」という句形で表現される時間帯は、丑の刻を含むというものであった。私たちは何となく「夜がふく」というと夜遅く、夜中になると、考えていた。しかし、実際の時間では現在風に云えば翌日の午前一時から午前三時の丑の刻を意識して使用されることもあるという主張だった。⁽⁴⁾

ここで、「夜」、「さ夜」が主語で在り、「更く」が述語であり、助詞「が」、「の」、「ぞ」などで結ばれる句形を、ヨノフク表現と呼ぶことにする。

その「ヨノフク」表現には、丑の刻も含まれるというものだった。前稿では、「夜がふく」と「丑の杭さす」、「丑一刻」「丑二刻」「丑三刻」との組み合わせの例を指摘し、おさらく、丑四刻も「夜がふく」に含まれるだろうと指摘しておいた。

ここでは「丑四刻」の例を出しておく。それは、有名な『枕草子』の次の例である。

大納言殿まゐりたまひて、文の事など奏したまふに、例の、夜いたくふけぬれば、御前なる人々、一人二人つつ失せて、御屏風、御几帳のうしろなどに、みな隠れ臥しぬれば、ただ一人、ねぶたきを念じて候ふに、「丑四つ」と奏すなり。

前稿では、右の用例を提出しなかった。それは、右の用例を見るとわかるのだが、「夜いたくふけぬれば」は、「御前なる人々、一人二人つつ失せて、御屏風、御几帳のうしろなどに、みな隠れ臥しぬれば、ただ一人、ねぶたきを念じて候ふに」に掛かっていくことは明白だが、「丑四つ」と奏すなり」までこの「ヨノフク」表現が掛かるかは疑問が少し残るのであった。前節の『百人

一首古注』で見たように、「ヨノフク」表現が「明け方」まで意識した表現だとわかると、この「丑四つ」も「夜いたくふけぬれば」が掛かっていくことが確認できるのだった。

前稿では、ヨノフク表現は午前三時までを意識した表現と予想されることを述べたが、本稿では、まずその確認を行ったのである。

四

先の堀論文では、ヨノフク表現について、「夜更け」は単なる時刻表示ではなく、切実に来訪を待つ人事の意味がこめられている」とも述べている。鋭い指摘であった。ここで注意しなければならないことは、ヨノフク表現は時刻表示ではないとは述べていないのである。時刻表示ではあるが、人事（閨怨）に連なる表現が多く見られると言っているのである。

それでは、ヨノフク表現はどのような時刻を表現していたのであろうか。前節で、ヨノフク表現は丑の刻と対応した表現が見られたことを再述した。さらに、ヨノフク表現には次のような歌も見られる。

日のうらうらとある昼つ方、また、いといたうふけて、子の時などいふほどにもなりぬらむかし、（『枕草子』二七三段）

182 さ夜なかと夜はふけぬらしかりがねのきこゆるそらに月わたる見ゆ（『古今集』）

6758 さ夜中とよやふけぬらしましまのかはおとすみてちどりなくなり（『夫木集』）

336 さ夜中とよやふけにけり月きよみなくやちどりのこゑのさむけさ（『宗尊Ⅱ』）

963 ふけにけりこれやたのめし夜はならむ月をのみこそまつべかりけれ（『新勅撰集』）

ヨノフク表現と「子の時」や「さ夜中」「夜半」という時刻に重なりが見られる表現である。それも、和歌の四つの用例はサヨ

ナカ（ヨハ）と夜が更けたと言っているから、ヨナカの時刻に到達したといったニュアンスが強いはずである。ヨナカはヨハ（夜半）と同じ時刻を表していた。午後十一時〜午前三時の間だった。『枕草子』の「子の時」と時間的には重なるのだった。

前節で、ヨノフク表現はヨナカの後半丑の刻と重なりが見られることは述べた。とすると、ヨノフク表現は、子の刻と丑の刻とを逢わせた時間帯ヨナカと重なる表現ではなからうか。ヨノフク表現はヨナカになったことを表現していたということである。もつと積極的に言うなら、ヨノフク表現は夜中の異名的表現だったのである。

当時、丑の刻（午前三時）までを夜（ヨ、ヨル）にとらえる認識があったと稿者は考えている。それは、ヨノアク表現、ヨロコメテの句形、ヨモスガラ、夜一夜などから推定できることは今まで縷々述べてきた。

この午前三時は男性が女性の家に出かけることができる最後の時間帯と考えられていた。こう考えると、堀論文のヨノフク表現に閨怨が含まれる意味がより理解できるのではないか。ヨノフク表現はヨナカ（午後十一時〜午前三時）を意味する時間帯だった。その時間帯は男性の来訪を待つ女性にとっては、その実現可能な最後の時間帯だったのである。

明日あると思う心のあさはかさよはにあらしのふかぬものかは

は世の無常を説いた真宗で使用される説教歌である。ヨハはヨナカと同時刻を指している。寅の刻（午前三時〜）には日付が変わる明日となるその前の時間帯をヨハ（午後十一時〜午前三時）にとらえていた。だからこそ、明日となる直前に桜の花は散るかもしれない、そのように明日があると思っはいけない。今日を限りと極楽往生を願えという意味の歌だったのである。

ヨノフク表現はヨハ・ヨナカの意味で使用されていたのだった。

五

先稿で、ヨヲコメテという句形の意味を述べた。⁽⁵⁾ヨヲコメテは、ヨモスガラや夜一夜よりは短い時間だが、午前三時までの時間を経過する意味だと述べた。ヨヲコメテにはもちろん夜が含まれる。夜が午前三時までの時間を意味して使用されることがあったのだから、ヨヲコメテは午前三時までの時間をずっとという意味になったのである。ただ、ヨヲコメテには面白い用法があった。

よをこめてとりのそらねははかるとも夜に逢坂の関はゆるさじ

は清少納言の歌の場合（この用法がヨヲコメテの中心用法だが）などは、午前三時までの時間になるまでずっとという意味でよいのだが、

暁の霞といへるこゝろをよめる

6 よをこめてたつかすみたになかりせは ひとりやこえむさやの中山（『経盛』）

などのように、暁を詞書に持ち、歌中に「夜をこめてたつ」のような表現がある和歌があることも述べた。この場合は、「たつ」のは午前三時である。午前三時までの時間を過ごして、午前三時に鳴る暁の鐘に促されて「たつ」（旅行に出発するなど）のだった。

夜をこめての主用法は午前三時までの時間を経過するという意味だったが、午前三時以降にもその用法は拡大されて使用されていたのである。もちろん、「夜をこめて」準備などをして、あるいは、「よをこめて」待ち構えていて、午前三時になりその後に、

のような使用法であったが。「暁」を詞書に持ち、歌中に「夜をこめて」が使用される場合、時間的にズレがあり、「夜をこめて」近接しての用法があったのである。

ヨノアク表現にもそうした用法があることを述べておきたい。

99 やすらはで寝なましものをさ夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな（『後拾遺集』）

も『百人一首』にとられた赤染衛門の歌だが、「かたぶくまでの月」は、「月かたぶく」と同表現だが、それは、暁の異名であるとされている。

つまり赤染衛門の歌は、「さ夜ふけて」とヨノフク表現で、ヨナカになったことを意味し、「かたぶくまでの月」で、その時間帯がヨナカを越えて、暁（午前三時〜御前ごじ）の時間帯にまでなつたと述べているのだ。口語訳するなら「男が来るかもしれないと待つてなんかいないで、さっさと寝てしまえばよかつたのに。男達が女の所から帰る、月も傾いた暁の時間になつてしまつたわ」とでも口語訳すべき歌だったのである。

ヨノフク表現にアカツキが連続的に使用されている用例は万葉以来少なくない。

107 我がせこを大和の遣ると小夜更けてアカトキ露に我立ち濡れし（『万葉集』）

この歌は大和皇女の歌である。大和へ帰れば死罪の待つ弟大伴皇子と午前三時近くまで別れを惜しみ、午前三時に旅立つ弟皇子を送つたという意味である。

571 夜ふくるかねのおとにはゆく春をしたふころもつきはてにけり (『千五百番歌合』)

この歌は、「さ夜ふくる」とヨノフク表現があり、鐘が鳴っている。季節の変わり目は午前三時であった。とするとこの「つきはてにけり」は午前三時の暁の鐘ということになる。

六

前節までに述べたことをまとめる。ヨノフク表現は時間がヨナカ（それはヨハダが）になったことを意味して使用される。時間はヨナカ（午後十一時～午前三時）になったという意味で使用される表現だった。したがって、ヨノフク表現は女性が男性の来訪を待つ閨怨の歌の中でよく使用された。ヨナカの次の時間帯はアカツキだが、歌の中ではヨノフク表現に続いて、アカツキが詠まれる歌もあった。

本節では散文の用例を見ていくが、そこでもやはり、ヨノフク表現にアカツキが連続して使用される用例が多いことがわかる。用例を上げる。

- 夜更くるまでは詩誦じ、暁方になりて (『うつほ物語』 国譲)
- しばしかと思ふに、夜いたうふけぬ。「権中将にこそあなれ。こは何事をかくみでは言ふぞ」とて、みそかにただいみじう笑ふも、いかでかは知らむ。暁まで言ひ明かして帰る。(『枕草子』二七四段)
- 夜更けて大殿籠りぬる暁方より、(『源氏物語』)

右には、ヨノフク表現と近接して「暁」が出現する用例だけを挙げた。ヨノフク表現の後に、「暁」がくることがここでも見

ることができる。ヨノフク表現にはアカツキという時間帯は含まれないことが確認されよう。ただ、こうした用例が少なからず拾えるのは、時間の流れに従って、夜中の描写をしていると、時間が過ぎアカツキになったという時間帯の変化が述べられているのだった。

七

最後に「かささぎの」歌について一つの事実を加える。「かささぎの」の歌には「夜ぞふけにける」と夜中になったと書いてあったが、アカツキになったとは書いてなかった。ところが、先の『百人一首古注』には、「冬の夜のあけかたに」とあった。「あけかた」は今の「(夜の)明け方」の意味ではないことは、二節で述べた。

明け方は

193 いでて行くあかつきがたのまきの戸をおしあげがたのわかれかなしも (『為忠』)

のような用例があることでわかるが、午前三時過ぎの意味だった。『百人一首古注』は「かささぎの」歌を午前三時過ぎの時間帯を詠んだ歌と理解していたのだった。ヨノフク表現にはアカツキの時間帯は含まれない。一方、前節までに述べてきたように、ヨノフク表現は時間の流れという観点からするとアカツキの時間帯をも包含している場合もあるから、『百人一首古注』のような解釈が成立しないわけではない。さらに、この歌の詠歌時間が午前三時過ぎだとすると、この歌の作者(女性)のもとには男性が来なかったことがわかる。

「かささぎの」の歌に戻ろう。二節で提示した『百人一首古注』をもう一度引用する。

かさ、きの渡せる橋とは、天の河の事也、七夕につはさをならへて、七夕をわたすといふ事あり、これより天川をかさ、さぎのわたせる橋といふ也、をく霜とは、あなちまことの霜にあらず、冬の夜のあけかたに、この河のきらきらとするを、銀河といへり、きらきらとするをみれば、よのあくるといふけいきを云也、月落鳥鳴霜満天、といふも、このこころ也（『百人一首古注』）

この解釈は、堀の解釈にいくつかの点で結びつく。又それ以降、述べてきた夜更けての私解を通じてこの歌の、少なくとも定家時代の解釈は次のようにまとめられる。

- ① このかささぎの橋は夜空の天の川のことである。
- ② 女性が男の来ないことを歎く閨怨の歌である。
- ③ この歌の時間は、夜中を過ぎて暁に及ぶ時間である。
- ④ 霜は天の河の輝きと重なって捉えられていた。
- ⑤ 霜は豊嶺の鐘の影響で暁に降りるものと考えられていたから、霜は暁の時間帯とむすびつく。

以上のようにある。

注

- (1) 堀勝博「鶴の渡せる橋に置く霜の」(『和歌文学研究』8 一九九〇年 和歌文学会)
- (2) 『百人一首古注』(古典文庫 291)
- (3) 拙稿「アケガタ考」(『アカツキの研究』第九章)
- (4) 「と夜更けて」(『暁』の謎を解く)第八章)
- (5) 拙稿「夜をこめて」(『暁』の謎を解く)第七章)